The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Investigating Schoolwork Engagement and Mental Health of Children Based on Structural Equation Modeling
Author(s)	江草, 信子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　江草信子　）	
論文題名	Investigating Schoolwork Engagement and Mental Health of Children Based on Structural Equation Modeling （スクールワーク・エンゲージメントと子どものメンタルヘルスについての構造方程式モデリングによる研究）

論文内容の要旨

【目的】学業の成功に関連するスクールワーク・エンゲージメント(SE)が、不安、うつ、ソーシャルサポートおよびストレスへの対処がどのように関連しているのかを構造方程式モデリング(SEM)で分析し、予防教育にいかす。

【背景】スクールワーク・エンゲージメントは、学校への関与に関する、子どもや青年の持続的で前向きな充実感で、「学びの聖杯」と呼ばれ、米国などで重視されてきた。職場の成人でのワークエンゲージメント（WE）研究は、学校の文脈に応用できる(Salmela-Aro K& Upadyaya K, 2014)。WEは、パフォーマンスなどを高める要因だが(Schaufeli WB & Bakker AB, 2004)、不安やうつに関係するとされている(Hakanen JJ, Bakker AB, Schaufeli WB, 2012; Innstrand ST, angballe EM, & Falkum E, 2012; Upadyaya K, Vartiainen M, & Salmela-Aro K, 2016)。

【問題】多様性やデジタル化など今日の学校の課題への対応しつつ、学びとメンタルヘルスを同時に高める必要がある。SEとメンタルヘルスの関係を明らかにし、エビデンスに基づいた不安うつの予防教育が求められている。

【方法】本研究は、地方2県4市の小中学校7校の５学年に質問紙調査を行った。クラス担任が授業時間を使って、教示を読み上げ、子ども自身が記入した。

【仮説】仮説1は、SEは不安とうつに関係する。仮説2は、逆に不安とうつがSEに関係する、仮説3は、ストレスコーピングがSEに関係する、仮説4は、ストレスコーピングが不安に関係する、仮説5は、ストレスコーピングがうつに関係する。仮説6は、ソーシャルサポートがSEに関係する、仮説7は、ソーシャルサポートが不安に関係する、仮説8は、ソーシャルサポートがうつに関係する。

【尺度】ワークエンゲージメント・フォー・スチューデント(UWES-S) 14 項目 6件法（Tayama J et al., 2019）、うつの尺度児童思春期用9項目(PHQ-A) 9項目中8項目4件法(Adachi M et al. , 2020)、不安の尺度(GAD-7) 7項目4件法(Muramatsu K et al., 2020)、青年の対処行動測定用具日本語版(ACOPE) 41項目5件法 (Nakamura NJ et al., 1993)および小中学生用ソーシャルサポート尺度12項目4件法　(Murayama Y, Ito H, Ohtake S, et al. , 2016)を使用した。

【倫理的配慮】千葉大学医学研究院の倫理審査委員会の承認後、研究に参加する生徒と保護者から、文書でインフォームド・コンセントを得た。

【研究参加者】9歳から15歳(M=13.9、SD=1.79)の日本の小中学生(4年生から中学３年生) 798人。内訳は女性497人、男性301人、中学生610人、小学生188人である。

【分析】相関分析、級内相関、多重比較、モデルの適合度の検討、構造方程式モデリングなどを行った。

【結果】SEは不安やうつに有意な関係はなく、その逆も同様であった（仮説1、仮説2）。ストレスコーピングは、SEに有意な正の中程度の効果をもたらし（仮説3：β=.509, p <.001）、不安に対する有意な正の弱い効果（仮説4：β = .225, p <.001）があったが、うつには有意な関係はなかった（仮説5）。ソーシャルサポートはSEに有意な正の弱い効果をもたらした（仮説6：β=.175, p < .001)。さらに、不安に対して有意な負の弱い効果(仮説７：β= -.378, p <.001)、うつに対して有意な負の弱い効果(仮説8 β = -.133, p < .01)を示した。仮説3, 6, 7, 8は支持され、仮説1, 2, 4, 5は支持されなかった。この結果、モデル1が採択された。間接モデルの検討は、モデルの適合度が悪かった。

【考察】先行研究では、WEは不安うつ低減に有意に関係し、本研究と一致しない結果となった。心理的、教育的、発達的3つの観点、生徒、仲間、学級、学校環境４つの文脈があることが職場環境との違いで、こうした影響が考えられる。SD-Rモデル研究やSD-R理論が急速に検討されるが、まだ完結していない (Bakker AB & Mostert K , 2024; Salmela-Aro K & Upadyaya K. 2014; Wang MT, Degol JL, & Henry DA, 2019)ため更に、研究が必要である。

【限界】横断研究であったため、縦断研究を行うことと、調査ではランダムサンプリングを行う必要がある。

【結論】SEは不安やうつとは関係しておらず、その逆も同様であった。ストレスへの対処は、不安をわずかに増加させる可能性があるが、SEの促進に寄与する。因果関係について、縦断研究でのみ明らかになる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　江草信子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	片山　泰一
	副 査　教 授	荒木　友希子
	副 査　教 授	平野　好幸

論文審査の結果の要旨

＜論文の概要＞

本論文は、Investigating Schoolwork Engagement and Mental Health of Children Based on Structural Equation Modeling（スクールワーク・エンゲージメントと子どものメンタルヘルスについての構造方程式モデリングによる研究）と題し、小児発達学の一分野における学校のメンタルヘルスの課題に対して、スクールワーク・エンゲージメントというポジティブな要因の観点から、うつと不安、ストレス・コーピング、ソーシャル・サポートがスクールワーク・エンゲージメントがいかに関係するのかを、構造方程式モデリングの手法による、新たな分析を試みたものである。

＜学術的貢献＞

申請者は、学校教育の今日の課題である心の健康と学業の成功を同時に追求するという点で、既存の教育理論と近年のスクールワーク・エンゲージメント研究を統合的に捉え、独自の子どものメンタルヘルスモデルの構築を試みた。先行研究では、ワーク・エンゲージメント研究でこれらの要因の因果関係が明らかになっていることを踏まえ、５つの要因について、構造方程式モデリングにより解析した点に、新規性・独創性がある。現在、スクールワーク・エンゲージメントによる理論モデルが検討される中、ワーク・エンゲージメントの先行研究の応用を試みたことは評価できる。残念ながら、本研究は横断研究のみではモデルを形成することはできなかった。本研究により、学力の向上のみではなく、教育の中でメンタルヘルスを保持増進することへの理解が一層深まり、メンタルヘルス支援学における新たな知見の提示として意義が認められる。

＜方法論や分析の妥当性＞

研究方法として、相関分析、級内相関、多重比較、モデルの適合度の検討、構造方程式モデリングなどを行った。798のサンプル数で、分析手法も適切であった。

＜論理展開の整合性＞

SEは不安やうつとは関係しておらず、その逆も同様であった上、ストレスへの対処は不安をわずかに増加させる可能性があるが、SEの促進に寄与することが示唆されたことは論理の展開として一定の評価ができる。

＜論文構成や表現の適切さ＞

論文の構成や表現においても、適切であり、大きな問題は見られなった。

＜口頭試問の結果＞

口頭試問（公聴会や最終審査）における理解度・対応力、質疑応答に対する姿勢や内容の正確さ・的確さにも大きな問題はなかった。

＜総合評価：学位授与の適否の判断＞

上記を踏まえて、スクールワーク・エンゲージメントと子どものメンタルヘルスについて、構造方程式モデリングによる研究で、子どものメンタルヘルスについて、メンタルヘルス支援において一定の成果があったと認められ、博士（小児発達学）の学位を授与するにふさわしいと判断される。